ゆびふらい二世

麻技准

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆびふらい二世

【Nコード】

N0150J

【作者名】

麻技准

【あらすじ】

家族であるピカチュウと子供店超から酷いDVを受けていた少年ゆびふらい。

だがある夜、彼は新世界の神に覚醒する。

彼は、超古代カンブリア期に神人類しんじんるいと高次元生命体作り上げた巨大な塔、『ジグラッド』の主、『ゆびふらい』の二世であったのだ！ゆびふらい二世は超パワーをもつジグラッドと、三つのしもべを使い、世界を破壊していく！

君は新たななる神話の目撃者となるのだ！

第一話 東京上空に謎の怪鳥あらわる！（前書き）

この作品は、なんか文章が凄まじいのと、空白が多いので苦手な方にはお勧めできません。

妄想1000パーセントで書かれているため、超つまんないかもしれません。

第一話 東京上空に謎の怪鳥あらわる！

この物語は、この世界とは他の世界にいる私の物語。

ゆびふらい、とは17歳の青年で、何をやっても駄目駄目な、のび太くんの男である。

都内に住んでいる彼は、世界から弾劾され、酷く世界に拒まれていた。

子供店超「ゆびふらいは童貞、補助金も！」

ピカチュウ「ゆびふらいとなんて補助金貰ってもヤだし、しねば？」

ゆびふらいは、この二人と暮らしていた。

説明は不要だと思うが、車のCMに出て来るガキと、電気ネズミである。

ナウシカ「死ねよゆびふらい」

碇ユイ「死ね」

マクドナルド「死ね死ね死ね死ね！！貴様はいらない人間なのだ！！」

なんか関係ない人達も、ゆびふらいをいじめています。

これが毎日続いているのです、悲しい。

ゆびふらい「さよならピカチュウ、子供店超。僕は行きます。呼んでいるんです、彼らが」

家の屋根に乗り、彼は夜空を見ていた。

眼光おっぴろげて、その周りにはクマができていた。

ピカチュウ「やっと死ぬ気になったか、はよ死ね。生命保険はかけてある、早く私に楽をさせる」

子供店超「ついに童貞が、キチガイになってしまった」

やってきたのは、巨大な鳥であった。

まるで戦闘機のように巨大な、鳥の怪獣だった。

ロプロス「キャウーン！」

ゆびふらいはその巨大な怪鳥の背中に飛び乗ると、まるで初対面ではないかのように命令を出す。

まるで、その怪鳥を前から知っていたかのような口ぶりで

ゆびふらい「来たか！さあ行こう！我が要塞ジグラッドへと！」

ジグラッド。

その単語を聞き、2階の窓際にいたピカチュウは戦慄する。

ピカチュウ「ま！まずいジグラッドだと?!」

子供店長「ジグラッドて何？」

ピカチュウ「神を奉る塔だ！早くゆびふらいを殺せ！でないと彼は神になってしまう！」

子供店超は、そのスーツの袖からマカレフを取り出し、怪鳥の背中のゆびふらいを狙い撃つ。

キュイーンキュイーン。

子供店長「だ、弾丸がきかねえ！？いや、何かに！！見えない何か
が止めやがった！！！」

ロテム「我が主の生命は、我らが必ず守る」

怪鳥の背に乗る、ゆびふらいの背後に、人間と同じくらいの大きさ
の黒い豹が現れる。

ゆびふらいはロプロスを家の前に座らせ、子供店超とピカチュウを
睨みつける。

ゆびふらい「くらえ子供店超！老化光線！」

子供店超「うわあああつ！？」

子供店超が！子供店超が老けていく！

中尾アキラ「なに！ワシがじじいに！」

なんか怖い顔面のじじいになってしまった！

ゆびふらい「ふはははは！私の霸道を止められるものなど誰もいな
いわ！死ねピカチュウ！」

ゆびふらいは指先から電撃を放つ。

それは、家の中のピカチュウを感電させ、死に追いやる。

ピカチュウ「あべしっ！？」

じじいになり、存在意義を失った子供店超、感電死したピカチュウ

を尻目に、怪鳥は飛び立つ。

背中には黒豹ロテムと、新世界の神ゆびふらいを乗せて。

ロプロス「いきましよう、ゆびふらい様。ジグラッドへ」

ゆびふらい「ああ、わかった」

しかし、物陰からその一連の流れを見ていたピエロがいた。

奴の名前はドナルド、断じてアヒルではない。

もう一度言う、断じてアヒルではない。

著作権に引っ掛かると嫌なのでもう一度言う、断じて、断じてアヒルではない。

ドナルド「やべえぞ！ランランルーやべえぞ！奴が目覚めちまった

！早くみんなを集めなければ！」

ピエロは慌てて走り出した。

そして、新世界の神を乗せた怪鳥は夜空の闇へと消えていった

続く

第一話 東京上空に謎の怪鳥あらわる！(後書き)

つまんなかったら忘れて下さい。

第二話 シゲラッドの主、新世界の神。(前書き)

ピエロであるドナルドは仲間を召集していた。
ゆびふらい二世を倒すために。

第二話 ジグラッドの主、新世界の神。

ゆびふらいはロプロスに乗り、東京上空に消えた。

ピエロであるドナルドは、某ハンバーガーショップに仲間を召集した。

ドナルド「ランランルー！やべえぞみんな！マジでランランルーだ！」

安達祐美「どうしたズラ同士よ！！」

ロボダッチ「私を呼び出すとは、何があった！」

なんか変な仲間だ。

因みにロボダッチが何者かわからない人はググるか、親に聞いてみよう。

マクドナルド「奴が目覚めちまった！ゆびふらい二世が！」

安達祐美「童貞なんてこの世界で最弱の生き物じゃないかズラ。私達、中古とヤリチンが集まれば瞬殺ズラ！」

ロボダッチ「しかし童貞なんて恥ずかしい奴ダッチ！！」

マクドナルド「ばかやろう！奴はジグラッドの主なんだ、『ゆびふらい』の二世なんだよ！！」

ロボダッチ「だから、なんで童貞に我々がビビらなあかんの！？」

それを説明するには、まず地球の歴史を紐とかねばならない。
超古代カンブリア期。

カンブリア文面を作り上げていた地球の先住人類。

そいつらは高次元生命体などが作り上げた海底のドームの中で生活していた。

先住人類は海底人類ノルマントを滅ぼし、海から空へと繋がる巨大な塔ジグラッドを建設した

『ゆびふらい』とはそのジグラッドの最初の主であり、最も人間に近い神である。

ジグラッドは神にも近い、いや神としか思えない能力が多数搭載されている。

やれ、自己再生能力。

やれ、自己増幅能力。

やれ、自己進化能力

マクドナルド「ジグラッドには最強の三つのしもべがいるんだバカ
タレが！しかもゆびふらい二世自身も最強のサイコネシス持ちだ
！」

ロボダッチはさっきまで食べていたハンバーガーを吐き出した。

ロボダッチ「うげえっ！なにいつ！！そいつはばねえ！今すぐに仲間を集めなければ！ランランルー！ランランルー！ランランルー！」

安達祐美「くそっ！！私は怖いズラ！逃げるズラよ！童貞なんて最後はマタを開けば許してくれるズラ！」

マクドナルド「まで安達祐美！！くっ… 行ってしまったかアバズ
しめ」

ロボダッチ「ランランルー！ランランルー！」
マクドナルド「ランランルー！！」

その頃、沖縄の美ら海水族館では…

ゆびふらいは怪鳥ロプロスから降り、周りを見回した。

ゆびふらい「なぜ、ここなんだ」

ロテム「この海にあるのです！ジグラッドが」

美ら海水族館にはすぐ近くに海がある。

イルカショーとか楽しい、よく学校やツアーでは行く場所である。

ゆびふらい「何かきたぞ！危ないロプロス！」

「

ゆびふらいは地上に降りたつたロプロスに警告する。

だが、遅かった。

夜空から、もう一匹の怪鳥と、巨大な三つ首の龍が出現したのである。

ラドン「今のうちに死ねやゆびふらい！！」

キングギドラ「カラカラカラカラカラ！！」

ロテム「そうはさせない！私の命の全てをかけて貴様達を倒す！」

ロテムはロプロスの背中に乗り、二体の怪獣に向かっていく。

ゆびふらい「やめろロテム！死んでしまっぞー！」

まだ本当の覚醒をしていないゆびふらいは、巨大な怪獣に対してはあまりに無力だ。

今のゆびふらいを守れるのはロテムとロプロスしかない！

頑張れ、ロテム、ロプロス！

続く！

第二話 ジグザグの主、新世界の神。(後書き)

つまらかったら忘れて下さい。

第三話 ちんぽ三つのごまへよー！（前書き）

脊髄反射的に作ってます。

第三話 さらば三つのしもべよ！

キングギドラとラドンを瞬殺したロプロス。

しかし、海の底から怪獣の王ゴジラが現れた、

ゴジラ「ギャオース！！」

ロプロス「危ない！ぐああああっ！」

放射火炎を浴び、火だるまになるロプロス。

ゆびふらい「ロプロース！」

ロプロス「まだだ！！私にはやらねばならぬことがある！ゆびふらい様を 守るのだ！！」

ロプロスは炎を纏ったまま、ゴジラに突撃した。

ゴジラ「！？」

放射能を撒き散らしながら、大爆発を起こすゴジラ。

ロプロスも、粉々に砕け散ってしまった。

地上に降り立っていたロデムは、流星に焦っていた

ロデム「これは危ない！敵は私達がジグラッドに入る前に、ゆびふらい様を消す気だ！ジグラッドよ早く出て来てくれ！」

美ら海水族館の屋外で、ゆびふらい達は右往左往する。

中尾アキラ「その通り！よくもボクをこんな姿に！死んでもらう！
行けケンシロウ！悟空！」

元子供店超が現れた、今はただのオッサンであるが。

ケンシロウ「ほあたあッ！！」

スーパーサイヤ人4悟空「かめはめはー！！」

ロデム「ぐうっ！私をなめるなあー！！」

ロデムはブロリーに姿を変え、かめはめはと北斗の攻撃を受けきつた。

ロデム「共に、死ねえっ！」

ロデムは二人を抱えて大爆発を起こす。

そして悟空とケンシロウは粉々に砕け散った。

中尾アキラ「馬鹿な！最強の二人が！」

ゆびふらい「ポセイドン！奴を生きて帰すな必ず殺せ！ロデムの仇をうつのだ！」

海の中から現れたのは、巨大なロボットポセイドンであった。

ポセイドン「ぐおー！！」

中尾アキラ「ぐうっ！巨大化！」

怖いオッサンはベータカプセルにより巨大化した。

因みにウルトラマンみたいな銀色の全身タイツをはいた姿になっていた。

ポセイドン「ぐあー!!」

スペシウム光線と八つ裂き光輪を放つ中尾アキラ。

しかしポセイドンはボロボロになりながらも、中尾アキラを締め上げる。

中尾アキラ「うおーやめろマフラーねじんなぐああ！」

どかーん

中尾アキラの爆発に巻き込まれたポセイドンはこれまた粉々に砕け散った。

ゆびふらい「共倒れ、か。どうすればいいんだ私は、三つのしもべを失ってしまった」

失意に沈むゆびふらい。

ジグラッド（いえ、違いますよ主。DTだかちゆ二世よ。来なさい）

そして、美ら海水族館の横の海から、突如姿を現す巨大な塔ジグラッド。

まさに神の住む城。

天まで続くかのような巨大なその塔は、テレパシスでゆびふらいの脳みそに直接会話をしていた。

ゆびふらい「これが、これが… ジグラッド！」

次回に続く。

第四話 メイド達のささやき(前書き)

美少女がいつぱい出て来ます、多分。

第四話 メイド達のささやき

ジグラッド内部には、様々な部屋があるのだ。

波動砲のコントロールルーム。

シャワールーム。

ベッドルーム。

個室ビデオ。

劇場。

食事ルーム。

後楽園遊園地。

マザー牧場ルーム。

超電磁ロボ格納庫。

まあ、横は東京ドーム並にでかい塔が、成層圏まで伸びているんだから、殆どのものが完備されているんだ。

だから、宇宙の果てに放逐されても、ゆびふらい二世は大丈夫なのだ。

だが、まだその主は塔の中にはいない。

ここは、従業員達の給湯室だ。

畳にコタツが完備されており、彼女達はここで休憩していた。

桂言葉「まだ、ですかねえ、ご主人様」

彼女は『スクールデイズ』の世界から召喚された美少女、桂言葉である。

アイシア「私達メイドガールズは、ご主人様が来てくれないと、やることないですよねえ」

彼女は『ダ・カーポ』の世界から召喚された、アイシアという美少

女である。

秋山漣「は、恥ずかしい、こんな服」

彼女は『けいおん』の世界から招かれた美少女、秋山漣である。
三人とも、紺色のメイド服を着ている。

アイシア「慣れると楽ですよ、漣さん」

桂言葉「そうですよ、それにご主人様が来てなくても、お料理を作ったり、色々おもてなしする準備をしないと」

秋山漣「へ、料理って、何作れば…」

桂言葉「お鍋なんて、よさそうですねえ」

アイシア「まさか… 空鍋!?!」

桂言葉「中に何もいませんよ… って! 私は空鍋回しません! もう! 普通のクリームシチューです!」

アイシア「あ、あはは! ですよねー!」

桂言葉「私は昔、酷い男と付き合ってたんですけど、この世界に召喚され、今は真っ当に働いているんです。だから、幸せなんです」

秋山漣「わ、私は早く学校に帰りたい」

アイシア「漣さんはバイトさんだから時間で帰っちゃうんですよね?」

秋山澗「う… うん」

極楽追尾音子「うにゃーん！ー！ご主人様が来たよ！みんなーッ！」

彼女はメイド長の極楽追尾音子

『スキマクラブ』の世界から召喚された、猫耳の美少女である。

アイシア「つ、ついに来たんですね！」

秋山澗「は、早く帰りたい…」

桂言葉「出来るだけ素敵な人だと、いいな。ご主人様」

メイド達は給湯室を飛び出し、広大な塔の中を走りはじめた。

第四話 メイド達のささやき(後書き)

なんか色々とごめんなさい。

第五話 ジグラッド起動

ゆびふらいはジグラッド内部に入った。

ジグラッド内部はどこもかしこも光り輝くコンピュータがびっしり張り付いた通路ばかりであった。

後楽園遊園地や個室ビデオルームは本当に楽しいコーナーは、また別の区画にあるのだ。

ゆびふらい「これが、ジグラッド内部。まんまバビルの塔やん」

桂言葉「あちらがパクったのです。こちらがオリジナルなんですよ」

横山光輝先生ごめんなさい。

圧倒的にこつちがパクリです。

ゆびふらい「き、君は？」

桂言葉「私はここで働くメイドさんです、始めましてご主人様。」

ゆびふらい「ん？目にクマできてるけど、大丈夫？なんか最近、辛いことあったん？」

桂言葉「え、ええ？そんなこと… ありません、大丈夫です。ありがとうございます、ご主人様。」

ゆびふらい「ま、まあ、ここで働く皆の気遣いも、私のやるべきことだからね」

桂言葉「あ、それより、あれがジグラッド様です、ご主人様」

彼女が指差す先には、なんかルパンの映画に出て来たような巨大な脳みそがあった。

ジグラッド「ちよリーす！どもー！私がジグラッドです！よろしきよろしく、ゆびふらいっち！一緒に世界を守るっぜー！」

ゆびふらい「なんかすげー馴れ馴れしいやつちゃんあ。つうか、でっかい脳みそですよん、マモーか？マモーなのか？」

ジグラッド「ごみに、ごみに！それより君、三つのしもべを召喚するんで、よろしくでオマ。名前を呼んでチヨ！ホンマ頼んまっせー！」

DT「だかちゆ」なに、三つのしもべ！？ロテム、ロプロス、ポセイドンの立場ないですよん！！」

ジグラッド「まあまあ、このジグラッド内部には、かわいい女の子も沢山いるから、許してちょー！」

ゆびふらい「許す！！」

ジグラッド「あんがとさんですぜボス！！集めんの苦労したんでっせホンマ！色んな世界探したんでっすぜ！」

ゆびふらい「よし！その功績を讃え、貴様はその馴れ馴れしいキャラであることを許す！」

桂言葉「ご主人様、女の子好きなんですね…。」

ゆびふらいを見て今は亡き昔の男を思い出してしまっ、桂言葉であ

った。

ジグラッド「なっ！？敵でっせ！」

ゆびふらい「え？全く揺れてないじゃん」

ジグラッド「当たり前だのクラッカーでんがな旦那！！このジグラッド、世界が崩壊しても、ゲッターエンペラーとガチンコファイトしても無傷ノーダメージの最大最強究極無比鉄壁無双不敗の塔でっせ！こんな奴らの攻撃で壊れるわけないでっしやる！」

ジグラッドはコンピュータールーム内に、外の映像を映し出した。そこには、ドナルド率いるランランルー軍団がいた。

ジグラッド「どうします？わっちの超メガトンストリウム重粒子確率変動因果率破壊砲なら、一瞬で奴ら消せますけど？」

因みにそのキャノン砲はゲッターエンペラーをも一瞬で破壊する威力をもっている。

ゆびふらい「えっ、味気ねえ。それ味気なさすぎ！私が、直々に出よう。世界に神を見せなければいけないし、ね」

ゆびふらい「何より、ここでそんな物騒なもん撃ったら、美ら海水族館壊れちゃいますやん」

ジグラッド「ま、まあわっちも美ら海水族館好きやし、周囲に被害出さんように精密射撃できますけど、あんさんがそう言うなら行って来た方がええわな」

桂言葉「行ってらっしゃいませ、ご主人様!!」

ジグラッド「帰ってきたら、わっちがベッドで待っててあげるさかいに!!体洗って!!」

ゆびふらい「生憎だが、脳みそと寝る性癖はない!!」

ゆびふらいはテレポートによりその場から消えた。

続く。

第六話 火の鳥、飛来。

その頃、ジグラッドの外では。

マクドナルド「くつ攻め落とせ超ランランルー軍団よ！今しかチャンスはない！」

スーパーサイヤ人4ゴジータ「かめはめはー！！」

ミウツー「死ぬ童貞達よ！サイコキネシス！」

巨神兵「ゴオーー！！」

エヴァ初号機「ふがあー！！」

ニルヴァーシュ「ぶぎゅー！！」

ゼオライマー「メイヴオーー！！」

ランランルー軍団の最強ロボに襲撃されるジグラッド。
しかし現実は厳しい、びくともしない。

ゆびふらい「ふ、愚かな。赤いピエロよ、無駄な抵抗はよせ、ジグラッドは無敵だそうだ」

マクドナルド「ふははは！飛んで火にいる何とやらだ！死ぬ！みんなで合体破壊ランランルービーム！」

ランランルー軍団の皆さん「合体ランランルービーム！」

ランランルー軍団は全員で一斉にビームを放射した。

そのビームは一直線に、ゆびふらいに向かって加速する。

ゆびふらい「よし、もういいだろう。現れる、新たなる三つのしもべよ」

初号機「う！うああああ！」

ニルヴァーシユ「やべえ初号機のアニキが苦しみ出している！何かかくる！何かか！！」

火の鳥「私が一のしもべ！火の鳥（手塚治虫原作）！ゆびふらい様に逆らう愚かな生命よ、死ぬがいい！！！」

ニルヴァーシユ「うぐぎやあー！！！」

ゴジータ「うべりやー！！！」

マクドナルド「や！やべえぞあいつ！火の鳥を従えてやがんのか！！！」

初号機「ぐうっ！では他のしもべも、同じくらいパネえのか！」

たじろぎ、陸上に逃げていく初号機。

その前に立ち塞がるのは

のらくろ「第二のしもべは、のらくろ陸軍大将であります！！！」

胸に沢山の勲章をつけた黒い犬。

のらくろ大将であった。

第七話 のらくろと桂言葉のターン

陸上で対峙するエヴァ初号機とのらくろ大将。

初号機「ふはははは！のらくろだと？笑わせるな！それなら私でも倒せるわ！！」

のらくろ「貴様、笑い過ぎだぞ」

そう、彼はゆびふらい二世の第二のしもべ、のらくろ大将である。本来の『のらくろ』の世界では日本は敗戦し、喫茶店のオーナーとなった『のらくろ』であったが、この、のらくろ大将は本来の歴史とは別の日本が戦争に勝利した『のらくろ』の世界からやってきた『のらくろ大将』なのである。因みに、陸軍大将である。

のらくろ「さて、進行するであります。進軍するであります、侵略するであります。破壊するであります、勇猛果敢な我が軍団よ」

初号機を無数の、それこそ無数の犬が襲撃する。

その腕には、ロンギヌスの槍と同じ特性をもった歩兵銃を持っていた。

初号機「うぎいいあああっ！？」

蜂の巣となっていく初号機。

のらくろ「我が世界では日本は戦後、再三に渡る使途の襲撃を受けているであります、アンチATフィールド技術はエヴァの世界を上

回っているであります」

ゆびふらい「ふははははは！犬を笑うものは犬に泣くのだよ汎用人類決戦兵器よ！」

マクドナルド「やべえ！マジでやべえ！このままだと確実に負ける！強すぎるぞ三つのしもべ！」

ミュウツー& amp · 巨神兵「ぐあああつ！」

ゆびふらい「ふははは！私が悪いのではない！世界が悪いのだ！」

マクドナルド「まだ三つめのしもべが出ていないが！？だがこっちは全滅だ！」

その時、ゆびふらいの元に一人の女性が擦り寄ってきた。

安達祐実「ふふ、ゆびふらい様、お願いだから私は見逃してえ、なんでもしてアゲルからあ」

マクドナルド「あ！あのクソアマ裏切りやがった！」

桂言葉「そつはさせませんよ？」

安達祐実「なに？この女…」

桂言葉「だかちゆ様に近づく意地汚い女は、私がこの包丁で排除します」

安達祐実「ぐあああつ！？」

第八話 ゆびふらい二世の弱点

ゆびふらいはジグラッド内部の瞑想ルームで瞑想していた。

瞑想ルームは、地球のあらゆる場所が三次元の立体映像で表現でき、バーチャル空間の中で瞑想することが出来るのだ。

因みに、今は地球のどこかはわからない海辺のバーチャル空間にいる。

ゆびふらい「世間ではFF最新作に熱狂しているが、もっと考えて取り組むべきことはあるでしょうが。例えば秋アニメが終わっちゃったこととか、どのジャンプの漫画が打ち切られるのか、とか」

もっと考えるべきことはあるでしょう。

地球温暖化とか。

海面上昇とか。

干ばつとか。

戦争とか。

貧困とか。

ゆびふらい「知るか、私は世俗は捨てたのだ。神だし」

世俗捨てたのにFFやら色々考えてますがな。

ジグラッド「んなことより、あんさんどないします？もうランランルー軍団も全滅してもうたし、この世界に我々の敵いませんで」

ゆびふらい「何？もう敵はいないのか？」

ジグラッド「ほんまです、みんな倒してもうたがな、我々無敵過ぎ

るんや」

極楽追尾音子「はにゃーん！失礼いたします、ご主人様！」

ゆびふらい「ん？どうした音子！？」

音子「ドリンクサービスです！野菜ジュースとペプシコーラですよん！」

ゆびふらい「悪い、私は野菜ジュース大嫌いなんだ、臭いだけでノックアウトできるよ、頼むんでペプシで」

音子「どうぞですよん！あっ」

思い切りコケる音子。

おぼんの上のジュースが、ゆびふらいにぶっかかった。

ゆびふらい「ぐあーっ?! なっ?」

ゆびふらいは黒いボブヘアに、華奢な体をもつ少女の姿になってしまった。

因みに何故かセーラー服である。

ジグラッド「あ、ゆびっち！」

ゆびふらい「きゃああっ?何?何が起こったの?教えなさいジグラッド！」

ジグラッド「ああ!そうや思い出した!ジグラッドの主、ゆびふらい二世は『神』だから観音様みたいに性別を超越した存在なんや、

だから水かぶるとそうなるんや!」

ゆびふらい「勘弁してくれ!」

音子「ごめんなさいにゃご主人様!ごめんなさいにゃ!」

ゆびふらい「だっ!抱き着くな胸に当たる!!はうんっ!ダメっ!
!ああっにゃ!!!」

泣きながらゆびふらいに抱き着く音子。

なぜか二人は、くんずほぐれつになっていく。

ジグラッド「やばい!R18の領域になるからとりあえず今回はこ
れで終いや!!」

因みに元に戻るには野菜ジュースを飲まなければいけません。

つづく

第九話 桂言葉 vs ヒトラー

ここは場末のスナック。

カウンターの前で、五人の人間が酒を飲み交わしていた。

ヒトラー「ドナルドが死んだか、だが奴らは我々『悪の六角柱』ろっかくちゅうの中ではザコの中のザコ」

スターリン「我々、悪の六角柱の中でもトップクラスの我々『超外人軍団』がジグラッドを完全に叩き潰せば、この世界は我々だけのものだ」

ペリー「ゆびふらいなど敵ではないデース、奴を倒す手筈はもう考えてある、美少女で誘い出し、毒殺しましょー」

ポルポト「おやじ、ボルシチおかわり」

エドガーゲイン「刻んでやるぜ」

バーのドアが開く。

悪巧みをしている彼等の元へ、一人の美少女が現れた。

桂言葉「そつはさせませんよ」

五人「なぬっ？」

ヒトラー「誰だ！貴様は！」

桂言葉「通りすがりのメイドです！覚えておいて下さいー！」

ペリー「くっジャパニーズクセモノですね！倒してあげマース！」

ガイアメモリ『クロフネ』

ペリーはガイアメモリを胸にぶつさすと、全身が砲台だらけの船の怪人に変身を遂げた。

クロフネドーパント「くっえキャノン砲！！　ぬなっ？！」

クロフネドーパントが武器を構えた瞬間、その首が吹き飛び絶命する。

桂言葉「ふふっ、ご主人様褒めてくれるかなあ、かわいがってくれと、いいなあ」

包丁を構えた桂言葉は、黒く沈んだ瞳で残る四人を見つめた。

ポルポト「くっ！くっちも　」

エドガーゲイン「変身だ　あれ？」

スターリン「ぬおっ？！」

三人はガイアメモリを構えた瞬間に真つ二つに切り裂かれた。残るは、ヒトラーのみ。

ヒトラー「貴様！よくも私の仲間を！」

桂言葉「あなたは他の人とは違うようですね！」

包丁で突撃する桂言葉。

しかし、ヒトラーはそれをすんでの所でかわす。

ヒトラー「ベルリンの赤い雨!!」

桂言葉「きゃああっ!?!」

ヒトラーのチョップが桂言葉のメイド服の胸元を切り裂く。
巨大な胸を抑えながら、桂言葉は後退する。

ヒトラー「アウシュビッツの惨劇!!」

ヒトラーの口から放たれた猛毒が、桂言葉に迫る。

桂言葉「!!」

危うし桂言葉!

次回へ続く!

第九話 桂言葉vsヒトラー（後書き）

乾燥がいつぱいもらえてうれちいでひゅ

第拾話 ケロロ大将 vs アドルフヒトラー（前書き）

因みに作者はスクールデイズ見たことありません。

第拾話 ケロロ大将 vs アドルフヒトラー

場末のバーでの戦いは続いていた。

桂言葉に迫る毒ガスは、光のバリアーにより遮断された。

のらくろ「よくやったメイド。後は任せるであります」

ヒトラー「え、ATフィールドだと？というか貴様は… のらくろ大将！？」

のらくろ「この世界のヒトラーは大分、ドイツ本国からも悪人呼ばわりされているでありますな。我々の世界では博愛主義者だと言うのに」

桂言葉「な、なぜ三つのしもべが、こんな場末のバーに？」

ケロロ大将「ゆびふらい軍団の最大司令官であるのらくろ大将は我輩と一緒に酒を飲みに来たのであります」

因みに彼はケロロ宇宙軍大将。

『ケロロ軍曹』の世界とは違った世界の、宇宙軍の大将となったケロロ軍曹である。

ヒトラー「くっ！？三つのしもべに嗅ぎ付けられたらもう命はない、拷問にかけられる前に」

ヒトラーは胸ポケットから毒薬を取り出した。

しかし、のらくろはそれを取り上げ、ヒトラーをぶん殴る。

のらくろ「馬鹿やろー！！お前もヒトラーなら、人々の幸せのために、残った命を使え！我輩の世界のヒトラーはそういう男だった！だからお前も変わるはずであります！」

ケロロ大将「そうであります！因みに我輩の世界のヒトラーは画家だったであります！」

ヒトラー「お… お前ら、ありがとう、俺、心を入れ替えて、一生懸命、他人の幸せのために」

そう宣言しようとした瞬間、のらくろ大将のピストルから放たれた銃弾が、ヒトラーの頭を直撃する。

ヒトラー「な… なぜだ」

のらくろ大将「数え切れないほどの大量虐殺をしておいて死んで復活して今更善人になろうなんて、ムシが良すぎるであります」

ケロロ大将「悪人は死んでも治らないものなんでありますなあ、のらくろ殿」

桂言葉「こ、これで一件落着なわけですね」

胸元などが切り裂かれたメイド服をきた桂言葉に、のらくろ大将は軍服を被せた。

のらくろ「寒いでありますよう、ささ、女の子は帰るであります」

桂言葉「あ、ありがとうございます、塔の中でシチュー作って待ってますから、どうぞのらくろ様も食べて下さいね！」

のらくろ大将「あとで、有り難く頂くであります」

そう言って、のらくろは酒を飲みながら、ケロロ大将と話を始めた。話題は、最近ケロロ大将が作った戦車模型の話であった。

つづく

第拾一話 アニメイヒ決定！

ここはジグラッド内部の瞑想ルーム。

ゆびふらい二世は、一面の原っぱが広がるバーチャル空間にいた。

ジグラッド「しっかし暇やなあ、なんかおもないわ！」

原っぱの上空に、ひたすらにデカイ脳みそ、ジグラッドのメインコンピュータが浮かんでいた。

ゆびふらい「その前に、ちっとは気を効かせて、この風景に合わせなさいよ君は」

ジグラッド「しゃあないなあ、ほならこれならどうや！」

ジグラッドは姿を変え、美少女に変化した。

腰まで伸びた長い黒髪に赤い瞳、ボンキュッボンな完璧モデル体型。そんな美少女に、ジグラッドは姿を変えていた。

ジグラッド「ふひひ！ほらほら！どやねんこのメイド服超露出度高いやろ！ほら萌えろ！私を愛するがいい！可愛がつてやるぞ」

胸元が思い切り開き、背中も大胆に露出しているメイド服を着たジグラッドはぴよんぴよん動き回る。

ゆびふらい「確かに完璧なモデル体型で、黒髪の長髪で端正な顔立ちでなんとなくアニメに有りがちな生徒会長キャラの姿をしている！！だがしかし！！」

ゆびふらいは抱き着いてくるジグラッドを半回転させ、背中を見つめた。

ジグラッド「なっ！ちょ！おまッ！！」

ゆびふらい「後ろは脳みそのまんまなんだよ！！」

ゆびふらいの台詞通り、ジグラッドの後ろ姿は、長い髪に隠れてよく見えないが、人の形に凝縮した脳みそであり、それがメイド服に収まっているだけであった。

ゆびふらい「しかも君、声優が若本規夫だから！！」

ジグラッド「ぶるああああッ！！バアレたか！！！」

ジグラッドは再び巨大な脳みその姿に戻った。

ゆびふらい「因みに私の声優は神谷さんだ！」

ティエリアとか絶望先生の人です。

ジグラッド「因みにアニメはシャーフトで来年春に放送予定だ！」

大嘘です。

ゆびふらい「その前に、ちょっとは人気作品にならんとあかん。まずそこから文庫化、漫画化、アニメ化やろっが！！！」

ジグラッド「追い越せ追い抜け！恋空！」

ゆびふらい「四コマ漫画になればアニメ化は楽かな？」

偏見です。

ジグラッド「その前にこの作品基本設定バビールやし、版權キャラ多過ぎやから無理やるマジでえ。マジ無理やし」「

そこで突き放しますかジグラッドさん。

ゆびふらい「メディア化不可能なんて！なんて大作なんだこの作品は！！」

そう捉えますか、この人は。

そんなこんなで、今回のお話は終わり。

第拾一話 アニメイヒ決定！（後書き）

アニメイヒ定って何ですか？

最終話 世界の破壊者(前書き)

どんな旅にも無駄はないよ、どんな人生にも無駄がないようにね。

最終話 世界の破壊者

ゆびふらい二世は、広大な宇宙空間に浮いていた。

超天才的な超能力者であり神でもある彼は、宇宙空間で体が張り裂けるなどという人間的要素は持ち合わせていなかった。

しかし。

しかし、そこで彼は戦っていた。

史上最大の敵と。

ゆびふらい「ぐあああッ?! 貴様は 貴様は何者だ!?!」

凄まじい超能力者であるゆびふらい二世を衝撃波で木星近くまで吹き飛ばす、彼の名前は

黒ゆびふらい「ふはははは!! 我が名は黒ゆびふらい!! 貴様を倒すものだ!!--」

ゆびふらいの連続蹴りを回避し、宇宙空間を光の速さで加速する黒ゆびふらい。

ゆびふらい「くっ!! 強い!! まるで私そのものだ!」

ゆびふらいは衝撃波を放つ、すると黒ゆびふらいはそれを吸収し、そのまま跳ね返した。

ゆびふらい「ぐああああッ!!--」

黒ゆびふらい「死ぬがいい! ゆびふらい二世! 全ての世界は俺が貰う!!--」

吹き飛ばされ金星に減り込むゆびふらい。
満身創痍の彼に、黒いゆびふらいは接近した。

ゆびふらい「まだだ！私には守るべきものがある　それは、
この世界に連なる全ての世界に生きる全ての命だ！！」

黒ゆびふらい「そんなものには何の価値もない！！全ては自分の快
楽のため、全ては自分のためにこの力を使う！！それが『ゆびふら
い二世』の真の姿だ！！それ以外の生命など無価値だ！！！」

ゆびふらい「違う！！生命は何よりも重い宝だ　人間は守るべき
もの、許すべきもの、だから私は戦う！！貴様のような存在と！！！」

ゆびふらいの腰にベルトが装着される。
それは仮面ライダーデイケイドが使用しているものに酷似した、様
々な刻印が刻まれたデイケイドライダーであった。

黒ゆびふらい「き…　貴様、何者だ！！！」

ゆびふらい「通りすがりの仮面ライダーだ！！覚えておけ！！！」

ゆびふらいはデイケイドライターにカードをセットする。
すると彼は光に包まれ、仮面ライダーデイケイドに変身を遂げた。
そして何故か、舞台はいつもの採石所へと変わった。

黒ゆびふらい「貴様が世界の破壊者デイケイドか！！！」

デイケイド「バレたか！！ゆびふらい二世の正体は仮面ライダーデ
イケイドだったのだ！！！」

デイケイドはゆびふらいと書かれた必殺カードを装填する。
そして飛び上がり、ライダーキックを炸裂させた

黒ゆびふらい「ぐあああッ!!」

デイケイド「やったか!？」

黒ゆびふらいは爆発する。

しかし、その姿は一気に再生された。

黒ゆびふらい「ふはははは!まだまだ 俺も真の姿で戦おう!!」

デイケイド「き… 貴様はデイエンド?!」

デイエンド「そうとも!!俺はデイエンド!!貴様を倒すために存在している!!」

デイエンドが構えた銃口から放たれた最終必殺技が、至近距離でデイケイドに炸裂する。

何故かその場に居合わせた桂言葉は絶叫する。

桂言葉「デイケイドー!!」

終わり。

最終話 世界の破壊者（後書き）

ライダー大戦は劇場へ

ネガ桂言葉「私がゆびふらいを倒す!!」

ディエンド「ゆびふらい… 死ぬな!!」

ジグラッド「これが本当の西園寺世界だったのか!!」

鳴滝「正体を現す時がきたな!!」

ゆびふらい「貴様が本当のゆびふらいだと!？」

小野寺「世界は俺が貰う!!」

第拾三話 本当の世界の破壊者は桂言葉

ここはジグラッド内部の瞑想ルーム。

ゆびふらい二世は、採石所を模したバーチャル空間にいた。

ジグラッド「で、全てゆびふらい二世の一人遊びでした、と」

ゆびふらい「うむ、余りに退屈だったので『黒ゆびふらい』なる存在を生み出し、仮面ライダーディケイド最終回ごっこしてました。反省はしてない」

桂言葉「でもご主人様かつこよかったです、しかも」

ジグラッド「しかも?」

桂言葉「しかも『世界』の『破壊者』なんて、素敵な名前ですう」

恍惚とした表情で、虚ろな瞳を輝かせる桂言葉。
ちよつと怖い。

もやし「そんなことより早くディケイドドライバー返せ」

バーチャル空間に、世界を飛び越えて本物のディケイドの人が現れた。

ゆびふらい「ありがとうディケイド、春の映画も頑張つてね!!」

もやし「本当にそう思ってるなら!この『もやし』って表記はないぞ!」

桂言葉「そうだ！皆さんで記念写真なんてどうですか？！」

小野寺「それいいね！言葉ちゃん！」

夏みかん「皆さんと出会えた記念ですね！」

海東「ちゃんとピンボケさせないでくれたまえよ、士！」

士「な！なんでお前らがここに？！つうかいつもの写真館になってるし？！」

バーチャル空間は夏みかんの写真館に変化した。

写真を机に固定し、セルフタイマーを起動させる士。

桂言葉「あれ？でも士さんの写真でポラロイドでセルフタイマー機能ついてましたっけ？」

そういうツツコミ入れない。

士「じゃあいくぞ！お前ら！」

全員「ハイ！チーズ」

その後、数時間に渡り、写真館で焼き焼きパーティーが行われたとさ。

そして数週間後

再び瞑想ルーム内部。

今日は再び原っぱが背景である。

ゆびふらい「あれ？なんか言葉ちゃんの横に見慣れない男子が…
な、浮気ですかあ？！」

桂言葉「ご、ご主人様！う… 浮気って、私達そもそもそういう関係じゃ」

赤面しながら首を横にふる言葉。

ジグラッド「しかも見慣れない女の子も横に写ってまんがな、しかも二人とも足がない…」

さて、この二人は誰でしょうか。
戦慄するジグラッドとゆびふらい。

ゆびふらい「ご… これはどういふことぞましょ？」

桂言葉「あ、あはは… 私、世界の破壊者ですから」

第拾三話 本当の世界の破壊者は桂言葉（後書き）

後悔はしても、反省はしていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0150j/>

ゆびふらい二世

2011年2月11日16時22分発行